

なりて、城内のかどかなる所に、こめられておはしけり、明暮唯夫君の事をのみ歎きて過し給ひしを、婢女に小萬といへるが、かひくしき女にて、候は都の清水寺におはすよしを聞出て、北の方に告げれば、いかにもして、そこに行ばやと思しけれど、人めまげきに思ひ煩らひ給ふ、小萬また城中よりの間道をかうがへ、水門より出て淀川を渡らばやすかりなんと、みづからものみし終りて後、北の方にまうし、自先番袋に手廻りの調度衣裳など取入、頭に戴ながら、夜に紛れて彼水門より忍び出、淀川をおよぎのぼりて、とある松陰に袋をかくし、又およぎてかへるさに心をつけて、小船の主もなきを見出し、おのれは水にひたりながらふねを押してゆく、折しも棹さへ流れきたれば、拾ひとりて、蘆原の便よき所に舟をかくし、北の方のおまへに参り、兄君を自の脊に負、いもと君を北のかたの脊に負せまゐらせ、からうじて彼舟にとりのせまうし、棹さしてかの番袋を取出し、ほのぐらき月かげに、たどるく、只あたりの女房の物まうでのけはひに取なしけれど、夜あけゆけば、行かふ人々見とがめて、たゞ人とはみえずなどいふを、きこしめして、北の方は心ぐるしういと、道をいそぎ給ふが、山崎のほとりにて、いとむくつけき男、あとさきになりて、いづくにおはす人ぞといふ、清水まうでするもの也とのみいひて過給ふに、此男思ふ所ありげに走り過しが、五條の東までおはしたる時、彼男大勢のわるものを引具して來り、四方より圍ければ、略 中 北の方小萬共に用意の懐劍をぬき出して切てまはる、略 中 北の方も數ヶ所の手疵に堪たまはず、清水の馬とゞめに休らひせめて、父君に妹をみせよとの給ひて息たえ給ふ、略 中 小萬は同じ道にと思ひしかども、妹君のために力なく思ひとまりて、略 中 父君のありかを尋得て、妹君を渡しまゐらせけるが、る騒動にも背に負へる疵一所のみにて、猶健なりしとなん忠にして智あり、まかも勇猛なるは、世にめづらしき女といふべし。

〔常山紀談 十七〕七日元和元の軍に、信仍田眞兵を出せしが、秀頼の出馬をす、めんため、子の